

障害をめぐるアセスメントのフィードバックに関する臨床心理学的研究

—援助者のコミュニケーションと現実構成に着目して—

心理臨床学専攻 佐藤 一 暁

I 問題と目的

アセスメントのフィードバックについて、久留(2003)が「臨床援助のための心理査定(アセスメント)とは、査定の結果が、査定を受けた人間の自己実現のためにフィードバックされることであり、しかも、査定者の臨床援助的人間観、治療観、発達観に根ざしていることが大切である」と述べているように、アセスメントとフィードバックは不可分であるといえる。アセスメントのフィードバックの際に、客観的なアセスメントの情報がどのようにクライアントの中で現実構成されるかということについて考えるには、相互作用的な視点が必要とされる。そのような視点をもつアプローチの一つに家族療法がある。家族療法では、Watzlawick(1984)の言うように「現実が発見されるというより発明される」とされる。それはインタラクショナル・ビュー(相互作用的なものの見方)をすることでクライアントと援助者、クライアントの周囲の環境の間に新しい現実が構成されるということであり、家族療法の基本的な考え方といえる。そしてそのような援助を続けていくことでFurman,B.&Ahola,T. (1992) が「ソリューション・トーク」と「プロブレム・トーク」という見方を強調しているように、クライアントが将来に望む希望を話すことが解決につながっていくと考えられる。しかしながらアセスメントの情報は援助者の行動を拘束(=コミュニケーション)するが、どのように援助者が拘束されるかということについては曖昧だといえる。そこで相互作用という視点からアセスメントのフィードバックを考えていく必要があるといえる。そこで本研究では、アセスメントという情報が、コミュニケーションにどのような影響を与えるかを検証し、相互作用という視点から、アセスメントのフィードバックの際に有用な知見を得ることを目的とする。

仮説1: アセスメントのフィードバックにおいて障害についての情報を強調した場合、問題志向のコミュニケーションが多くなるだろう。

仮説2: アセスメントのフィードバックにおいて解決策やポジティブな情報を強調した場合、解決志向のコミュニケーションが多くなるだろう。

II 方法

・行動観察VTRの作製: 了承の上、実験協力者(IP)が自然な形で身体を使う活動と課題的な活動をしている場面を撮影し、行動観察VTRを作製する。

・実験手続き: 実験対象者に10分間、行動観察VTRを視聴してもらう。その後、実験対象者にリソースの情報、障害の情報をそれぞれ下線強調したソリューション(S)条件群、プロブレム(P)条件群、下線強調を行わないニュートラル(N)条件群の3種類のプロフィールを提示して群分けを行う。提示後、別室にて、実験対象者に、「実験協力者の印象」と「その方の援助についてどう関わったらよいか?」という項目についての会話場面を録画する。会話終了後、質問紙による調査もあわせて実施する。実験終了後、実験対象者には、実験協力者についての情報が架空のものであることを伝え、実験の仮説と目的を説明する。下線をひくことについて魚崎(2003)は「テキストの下線強調は、文章の難易度や読解時間の長さに関わらず、強調部分の再生効果を高める効果を持つ」「テキストにつけられた下線は下線部以外の再生は促進しない」としている。

・質問紙: 質問紙は会話ストレス度尺度、問題解決度尺度、リソース印象尺度の3つを使用し、6段階評定にて算出することとした。

・分析: 実験について得られたVTRより開始2分後から2分間の会話場面のプロトコルを作成。言語では、発話数・文脈からの分類・共感反応、非

言語では、対人言語・視線・反応を示すうなずき・反応を求める頭の動き・相互作用的ジェスチャーをコーディングする。質問紙については得られた結果から、分析1として因子構造の把握をおこない、分析2として各因子の群間比較をおこなう。

III 結果と考察

言語行動の分類ではソリューション・トーク、ディスクオブリケーションに有意な差は見られなかったが、プロブレム・トークでは10%水準で有意な傾向が見られた($F(2,24)=2.80, p<.10$)。これはS条件群がN条件群よりも問題を描写する会話が增多するという結果であった。この結果について、解決に焦点が当たっていても、その解決策の確認として、プロブレム・トークが增多するという可能性が考えられた。ニュートラル・トークでは10%水準で有意な傾向が見られた($F(2,24)=3.21, p<.10$)。これはP条件群がN条件群より解決とも問題とも分類されない会話が少なくなるという結果であり、P条件群においてはN条件群よりも、VTRからの情報についてなんらかの主観的な意味づけがなされていると考えられる。共感反応では1%水準で有意であった($F(2,24)=8.67, p<.01$)。これはS条件群が、N条件群、P条件群よりも有意に実験協力者に対して共感的な会話が增多するという結果であり、S条件群ではN条件群、P条件群よりもVTR中の人物の立場に立って発言していることが考えられた。

非言語行動の分析として、マネジメント言語を特定し、相互作用レベルを測定した結果、相互作用レベルは、5%水準で有意であった($F(2,24)=4.29, p<.05$)。これはS条件群がP条件群よりも実験対象者同士の相互作用レベルが上がるという結果であり、S条件群では提示されたVTRについて問題レベルは高く感じているものの、その問題に対して実験対象者同士で解決に向かおうとしていると考えられた。沈黙は10%水準で有意な傾向が見られた($F(2,24)=2.79, p<.10$)。これはS条件群がP条件群より沈黙が少なくなるという結果であり、S条件群では会話が促進していると考えられた。笑顔に有意な差は見られなかった($F(2,24)=0.41, n.s.$)。

質問紙の分析として、会話ストレス度尺度では10%水準で有意な傾向が見られた($F(2,51)=2.53, p<.10$)。これはS条件群がP条件群よりも会話についてのストレスを強く感じるという結果であり、S条件群ではより問題に向き合うことで会話ストレスを高く感じるのではないかと考えられる。問題解決度尺度では有意な差は見られなかった($F(2,24)=1.17, n.s.$)。リソース印象尺度では因子分析の結果、“障害対策因子”“成長信頼因子”“未来希望因子”“ソーシャル・スキル因子”“集中過多因子”が抽出された。各因子で分析を行ったところ障害対策因子、成長信頼因子、集中過多因子で有意な差は見られなかった。未来希望因子では10%水準で有意な傾向が見られた($F(2,51)=2.99, p<.10$)。これはS条件群がN条件群よりも、実験協力者の未来について希望的な印象が増えるという結果であり、実験協力者の未来について希望的な現実構成がなされたと考えられる。ソーシャル・スキル因子では10%水準で有意な傾向が見られた($F(2,51)=2.56, p<.10$)。これはP条件群がN条件群よりも実験協力者のソーシャル・スキルについて高く評価するという結果であり、実験協力者のソーシャル・スキルについてポジティブな現実構成がなされていたと考えることができるが、一方で実験協力者のソーシャル・スキルについて甘く評価しているとも考えられる。

以上の結果を総合すると仮説1は支持されなかったが、仮説2については概ね支持された。

IV 臨床への示唆

今回の実験設定は、実際に学校関係者や子どもの援助に関わる人に対してアセスメントのフィードバックやコンサルテーションを行なう場合につながる実験設定である。そのような場でアセスメントのフィードバックをおこなう際には解決に焦点を当てたフィードバックが有効だと考えられる。

<引用文献>

- 長谷川啓三監訳(2007)「ブリーフコーチング入門」創元社Berg.I. K.& Szabo.P(2005)「Brief Coaching for Lasting Solution」W.W.Norton&Company.
- 久留一郎著(2003)「発達心理臨床学」北大路書房
- 魚崎裕子(2003)「テキストへの下線引き行為が内容把握に及ぼす影響」日本教育工学会論文誌